

## ラシーヌ劇の歴史的な性格究明をめぐって

安藤 隆之

私は先の修士論文《Le problème de l'inspiration janséniste dans les tragédies de Jean Racine》で、ヤンセン主義 jansénisme と、ラシーヌ劇の関係を取り上げ、ヤンセン主義の理論家ヤンセン Jansen（ラテン名はヤンセニウス Jansenius）の著書「Augustinus」<sup>(1)</sup>によって、ヤンセン主義がラシーヌ劇の思想的根幹をなしていることを明らかにした。しかし、この際、ある一定の観念形態としてのヤンセン主義という取り組み方をしなかったし、ラシーヌ Racine がなぜヤンセン主義者であったかという問題についても、ラシーヌとヤンセン主義運動の本拠であるポール＝ロワイヤルとの結びつきを伝記的に実証するにとどめ、その歴史性を説明するところまでは論じなかった。こうした取り組み方をすれば、ヤンセン主義の持つイデオロギー的性格を究明した上で、具体的には、ヤンセン主義の理論的分献、すなわち、ヤンセンの著書は言うに及ばず、Saint—Cyranの再生論<sup>(2)</sup>、Arnauldの「頻繁な聖体拝領—La Fréquente Communion—」<sup>(3)</sup>等をイデオロギーとしての側面から分析するだけでなく、その親近性と相違点が問題になっているカルヴァン主義 calvinisme との関係性を明らかにし、更に、ヤンセン主義のよって立つ社会的基盤はどこで、その歴史的役割は何であったのか Racine の属する勢力はどこであったのか、等々を研究して、今一度ラシーヌ劇に戻って考えてみるという作業が必要であり、修士論文の時点までの私の貧しい研究成果では論ずることができなかった。とって現在確信を持って論ずることができる訳ではないが、今後の研究に問題提起、あるいは展望を与えるという形で論じてみようと思う。

さて、今までの実証的研究によって周知の事実とされていることが幾つかある。

第一に、Racine の出身階層についてであるが、P. Mesnard<sup>(4)</sup>、R. Picard<sup>(5)</sup> らの研究によって、彼がパリの東北数十キロの小さな町 La Ferté—Milon の高等法院階層 (諸高等法院を中心とする官僚組織に属する人々) の家に生まれていることが明らかになっている。即ち、Racine の父方の Desmoulins 家も Racine 家も代々百年以上にわたり、塩税徴収吏<sup>(6)</sup> を務め、母方の Sconin 家も同様であるが、祖父の Pierre Sconin にいたっては、高等法院長を務めてさえいる。Racine の父もまた、塩税徴収吏であり、同時に代訴人 procureur として、高等法院階層 parlementaires の一角を占める人間であった<sup>(7)</sup>。Racine は御存知のように宮廷詩人として名をなすが、1674年にフランス財務官 trésorier de France の資格を得、高等法院階層の上層部である法服貴族 gens de robe にまでなっている。以上簡単ではあるが、Racine が高等法院階層に生まれ、その階層の人間として生きたことは明白である。

第二に、Racine とポール＝ロワイヤルの関係については、その密接な関係が自明の事実となっている。即ち、Racine の父方の祖母の姉 Suzanne Desmoulins は、その夫 Guillaume Bassart の死後 (1625年)、ポール＝ロワイヤル修道院 — couvent de Port — Royal にはいり、Soeur Julienne de Saint—Paul になっている。同じくその妹の Claude Desmoulins (=M<sup>me</sup> Vitart) の息子 Nicolas Vitart は、1637年ポール＝ロワイヤルの学校 école de Port—Royal に入学している。また Racine の父方の伯母 Agnès Racine は、Racine が生まれてまもない1642年、ポール＝ロワイヤル修道院の志願女 postulante になり、49年修道女 professe として、Agnès de Sainte—Thècle となっている。更に、1638年ポール＝ロワイヤルの隠士達 les Solitaires に解散命令が下されたとき、その中の3名、Lancelot, Antoine Le Maître, Le Maître de Séricourt は、La Ferté—Milon の Claude Desmoulins (=M<sup>me</sup> Vitart) の家にかくまわれ、1年以上も滞在している。次に Racine 個人について

は、生まれて(1639年)間もなく両親共になくし、祖父母の J. Racine と Marie Desmoulins に引き取られるが、祖父の死後(1649年)、祖母 Marie と共に、ポール＝ロワイヤル修道院に移住している。Racine は、Petites Ecolès de Port—Royal への入学から、以後10年もの長い間ポール＝ロワイヤルの庇護の下に暮らした。

第三に、ヤンセン主義のよって立つ社会的基盤については、Sainte—Beuve の名著「ポール＝ロワイヤル Port—Royal<sup>(8)</sup>」をはじめ、Augustin Gazier の「ヤンセン主義運動の歴史—Histoire Générale Du Mouvement Janséniste—」<sup>(9)</sup>、Jean Orcibal の「Les Origines du Jansénisme」<sup>(10)</sup>、更には Racine 自身の手になる「ポール＝ロワイヤル小史」<sup>(11)</sup>などによって、それが高等法院階層、とくにその上層で、旧来の剣貴族 gens d'épée に対して法服貴族 gens de robe とされる人々を基盤としていたことが事実として明らかになっている。

ヤンセン主義運動の指導者の中で、その理論的基礎を与えた Cornelius Jansenius は、1585年オランダの小さな村 Acquoy で、貧しいカトリック信者の家に生まれ、色々の経緯の後、神学に志し、パリに出、1636年 Ypres の司教に叙階された後、対外的にも対内的にも権威を失いつつあったカトリック教会 l'Eglise catholique 再建のための神学論文「Augustinus」を残して1638年5月6日世を去った。今までの研究段階では、彼の出身階層がどこなのかよくわからないが、我々の関心事からすれば、そんなに重大なことではないように思う。なぜなら問題は、彼が残した神学論文がどの人々のために書かれたのか、あるいはイデオロギーとしてその果たした歴史的役割は何であったのかであり、それに答えるのに、彼の出身がどうであったかは、そんなに必要なことではないからである。

初期のヤンセン主義運動で、純然たる理論家の Jansenius と対照的な指導者は、その政治家的才覚で知られる Saint—Cyrano (1581—1643) である。彼は本名を Jean Duvergier de Hauranne と言い、Louvain のイエズス会の学校を出て、パリとバイヨンヌ Bayonne とに学んだ時、Jansenius と知己になり、共に Augustinus の神学に傾倒した間柄であ

る。彼はのち 1618年 司教に叙階され、20年 Saint—Cyran の修道院長となり (これ以後 Saint—Cyran と呼ばれるようになった。), 同じ頃, Augustinus 派の Bérulle<sup>(12)</sup> と親しくなり, カトリック教会の改革に乗り出す。Saint—Cyran の出身階層は, Franz Borkenau によれば, 「その素性は異論のあるところであるが, その家族がジェントリーに属していたことは, かなりの程度に本当らしい。」<sup>(13)</sup> Borkenau の言う所の「ジェントリー」は, 名称的には, イギリスの貴族に次ぐ紳士階層を意味する gentry と同じであるが, 彼は, これを一つの歴史的カテゴリーとして用い, フランスの場合, 高等法院階層のことを指している。

——絶対主義下のフランスにおいてもっとも強力な, もっとも独立した政治的にも精神的にももっとも積極的な階級であった法服貴族もまたジェントリーである。——<sup>(14)</sup>

さて Borkenau が何を根拠として言っているのか明示していないので確認するすべがないが, 我々の知るところでは, Saint—Cyran は, 高等法院階層に属する Richelieu<sup>(15)</sup>, Arnauld d'Andilly<sup>(16)</sup> らと共に, 絶対王制の中央政府とも言うべき国務議会Conseild' Etat, あるいは, 枢密院Conseil d'en haut への候補者として一群を形成していたのであってみれば, これらの機関が高等法院階層の人々によって占められていたのだから, 彼が高等法院階層の出身であっても何ら不思議ではない。しかし, いづれにしてもこの問題は今後の研究に待つほかない。

次に Jansenius の理論と Saint—Cyran の志に, 言わば場を提供するのが Arnauld<sup>(17)</sup> 家であるが, この一族は代々バリの名門の法服貴族である。Saint—Cyran の死後 (1643年), ポール＝ロワイヤル修道院を中心にヤンセン主義運動を展開していくのはこの Arnauld 家であった。普通 grand Arnauld と呼ばれている Antoine Arnauld (1612—94) は, パリの名門出の弁護士 Arnauld (1560—1619) の三男であるが, Sorbonne の神学部で学んだ後, Saint—Cyran の指導でヤンセン主義者となり, 「

ヤンセン弁護論」をはじめ、有名な「La Fréquente Communion」を発表するなど、運動の積極的推進者として活躍する。同じく Arnauld の娘で Marie Angélique(1591—1661)は、7才で Port—Royal des Champs の修道院に入り、11才で院長になり、聖体修道会 Institut du Saint—Sacrement を設立したり、修道院をパリの Saint—Jacques 地区へ移したり、修道院改革とヤンセン主義運動の女性指導者として活躍する。同じく Arnauld の息子 Henry Arnauld (1597—1692) は、はじめ法律家であったがのち聖職につき、1649年 Ange の司教になり、後年にはポール＝ロワイヤルの修道院長となった。更に、Arnauld の孫娘 Angélique (1624—1684) は、19才の時、同じく修道院に入り、伯母の Marie Angélique の指導を受け、1678年修道院長となった。彼女は、ヤンセン主義の迫害の中であって、同院の指導者として活躍し、覚え書き「Mémoires pour souvenir à l'histoire de Port—Royal」を残している。

次に、Arnauld 家と並んで、運動の主体的な推進者であったのは、Le Maître 家である。この一門も、パリの高等法院階層に属している。中でも Arnauld 兄弟の甥にあたる Antoine Le Maître (1608—1658) は、パリ高等法院の優秀な弁護士であったが、ヤンセン主義者として Port—Royal 修道院の隠士 solitaire となった。その引退が与えた社会的波紋が大きかっただけに、L. Goldmann は、とくにそのイデオロギー的性格を強調している。<sup>(48)</sup> またその弟で、Pascal との対話「Entretiens avec de M. de Saci」によって有名な人物 Issac Louis (1613—1684) は、De Saci と自称し、兄と同じく隠士として運動に参加している。同じくその兄 Le Maître de Sérécourt (1611—58) もまたヤンセン主義の隠士であった。その他ヤンセン主義運動の参加者として有名な人は多いが、(例えば Pascal 家もまた高等法院階層に属している)、長く列挙するまでもなく、Saint—Beuve がその著「Port—Royal」の中で述べているように<sup>(49)</sup>、ヤンセン主義運動の社会的基盤は、高等法院階層であると言ってよいようである。

しかし、ここで若干問題になることは、Saint—Beuve が、同著の中で、

ヤンセン主義運動の支持者として旧来の貴族 *gens d'épée*, *les Luines*, *les Liancourt*, *les Guemené*, *les Sablé*, *les Gonzague*, *les Longueville*, *les Roannès* の諸家を上げていることである。Sainte—Beuve は、これらの事実を述べた後、

— mais ce ne fut pas là son vrai centre d'opérations. La plupart de ces noms illustres ne se rattachèrent à Port—Royal qu'un temps et s'y ancrèrent pas. —

と指摘し、ヤンセン主義の主体的な社会階層が高等法院階層であった事実にかわりがない訳で、特に問題視する必要がないように見えるが、その高等法院階層、あるいはその上層である法服貴族 *gens de robe* の歴史的な性格を規定する際、具体的には、小場瀬卓三、Lucien Goldmann、Henri Lefebure の諸学者が、この階層をマルクス主義でいうブルジョワジーの上層であると規定するとき、この現象をどう片付けるかでひっかかりがでてくる。このことは別の所で新たに触れる。

以上まとめてみると、ヤンセン主義はラシーヌ劇の思想的根幹を成していること（これは修士論文で論証した。）、Racine とヤンセン主義運動の本拠 Port—Royal との関係は伝記的に明白であること、ヤンセン主義の社会的基盤が高等法院階層であったこと、そして Racine 自身この階層に属していたことが確認された。

これらの事実をもとに次に解決すべき問題は、ヤンセン主義の社会的基盤である高等法院階層の歴史的な性格が何であったかということと、イデオロギーとしてのヤンセン主義の歴史的な性格が何であったかということと、そして最後に、我々の最終的関心事、ラシーヌ劇のイデオロギー的性格は何かである。

高等法院階層の歴史的な性格を明らかにするためには、当然のことながら、フランス絶対王政 *monarchie absolue* の把握が必要となってくる。しかし、この絶対王政の把握は、歴史学界でも今だ未解決の問題で、現在

色々たかかわされている諸見解を前にして、どれが真実なのか、早くも一つの障害を迎える訳である。といて、文学のイデオロギー的側面を問題として取り上げる限り、社会的基盤の研究を避ける訳にはいかない。従って、歴史学者と響を並べて歩くことは困難であるけれど、今まで発表されている論文の成果をもとに、妥当と考えられる見解を立てて論を進めるしかない。

さて、この問題をどう解決すればよいのか、フランス17・8世紀文学の代表的研究者として著名な小場瀬卓三、フランスの哲学者 Henri Lefebure そしてここ数年日本で注目を浴びている哲学者 Lucien Goldmann（この人物は、去年の暮れに亡くなっている。17世紀文学史を書くと言っていただけにその突然の死が惜しまれる。）、三氏の考え方を例に上げ、批判検討しながら、絶対王制の構造、高等法院階層の歴史的な性格、更にイデオロギー問題も取り上げつつ、論を進めて行く。

小場瀬氏は、恐らく戦前の羽仁・清水両学者のこの分野における研究<sup>(20)</sup>あるいはエンゲルスの見解<sup>(21)</sup>をもとに、絶対王政の成立を次の様に考えた。即ち、「急速な商業の発達にともなう社会的変動は激烈な階級闘争を結果せずにはいなかった。それこそ史上宗教戦争と呼ばれる内乱だった。この内乱は、……フランスでは両者（ブルジョワジーと封建貴族）の力がほぼ均衡し、どちらも相手を押えつけるほど優勢でなかったために、妥協に終わった。その結果、この力の均衡関係を利用し、ブルジョアジーの力を制するには封建貴族の力をもってし、他方、封建貴族の力を押えるのにはブルジョアジーの力をもってし、その両者から相対的独立を保ちながら、一握りの官僚を駆使して専制政治をおこなう絶対王政が時の趨勢であることが明らかになった。」（「古典主義・浪漫主義」p. 15. 三一書房1957年）、  
「貴族がもはや町民階級を抑圧することができず、他方、町民階級の力が完全に貴族を掃蕩できるほど成熟していなかったとすれば、この両者から相対的に独立し、……」（「近代精神」p. 61. 世界評論社1949年）など、終始一貫して、「絶対身分王制は封建貴族と町民階級との勢力の均衡の上に成立する。」（「モリエール一時代と思想」p. 70. 日本評論社1948年）と考

えている。だが、こうした「均衡」論は、果して事実にも忠実な認識であろうか。原理的に見れば、農民を経済外の力、つまり武力を背景とする政治権力で土地に縛りつけ、これを収奪することで成り立っている封建的生産関係の社会に、資本主義的生産様式を基盤とするブルジョワジーが生成発展し、遂には、いわゆるブルジョワ革命 *révolution bourgeoise* によって、封建的足枷から解放され、資本主義を全面的に展開して行くのだから、その過程で封建貴族とブルジョワジーの均衡 *équilibre* があっても不思議ではないように思える。だが、フランス絶対王制 *absolutisme* は、解体しつつある封建的土地所有と生長しつつある資本主義との二種の生産様式の対抗の上に立っていても、この二種の生産様式に各々よって立つ両階級の均衡の上になど、客観的事実として成立していなかったのである<sup>(23)</sup>。なぜこのような誤りを犯したのだろうか。それは、実証的研究がまだ不充分であったこともさりながら、絶対王政の初期の段階（Henri IV, Louis XIII 時代）で、中央官僚組織の実権を握っていた高等法院階層、およびその上層部である法服貴族階層 *gens de robe* を、都市商人 *bourgeois* 出身で、旧来の封建領主階級 *seigneurs féodaux* = *gens d'épée* に対立しているからといって、近代的ブルジョワジーであると断定してしまったからである。また、「封建貴族とブルジョワジーの均衡」という認識の際、封建制に対し、大きな破壊力を持っていた農民一揆のことを忘れている。話を日本について考えてみても、江戸時代という歴史が、農民一揆なしで考えられるだろうか。

小場瀬氏は、両階級の均衡という誤認から、絶対王政が半封建的半ブルジョワ的であると考えたが<sup>(22)</sup>、「根源的に相互排除の関係において対抗し合う生産様式の上にそれぞれ基盤をおき、根源的に敵対している両階級の対抗関係を機械的に反映して、同一の国家権力の本質が二分されているなどということはありません。」<sup>(24)</sup>のである。この誤りは、文学というものが究極的には経済的情勢によって規定されるものとしても、政治的情勢による影響の著しさを考えれば、重大であると言わねばならないだろう。論を今少し具体的に展開しよう。



先にも引用した様に、小場瀬氏は、宗教戦争という名の階級闘争が、封建貴族 *gens d'épée* とブルジョワジー、(＝町民階級<sup>(25)</sup>) 両勢力の均衡によって妥協に終わったと考える。「妥協」とは、ブルジョワジー側から言わせれば、Henri IV<sup>(26)</sup> が絹、壁掛け、ガラスその他にわたって40の王立工場を設立し、鉱山を開発し、海外植民地開発の事業に手をつけるなど、かれらを庇護し、国家機関(國務會議 *Conseil d'Etat*, 会計院 *chambre de comptes*, 税務院 *chambre des aides*, etc) にかれらを採用し、旧貴族 *gens d'épée* には拒否したので、旧貴族を倒すには今少し力が足りないことだから、ブルジョワ革命を諦めたということであり、封建領主層＝旧貴族から言わせれば、憎きブルジョワ供を倒すにはもう力がない、幸い Henri IV は、自分自身が「最大の封建領主」<sup>(27)</sup> であるから、連中を庇護すると言っても限度があり、かれらの頭を押さえてくれるので、我慢するかということである。所が、宗教戦争 *Guerre de religion* は、このような妥協によって終結したのではなかった。この内乱には、大別して三つの勢力があった。第一は、農民層のブルジョワ的分解や商業の発展に伴い封建制の解体する中で、旧来の地方分権的領主制を守り抜こうとする封建諸侯の勢力、第二は、封建制そのものに根源的に対立する農民・手工業者・初期マニュファクチュア工業者層、そして第三に、都市商人の出身で、封建諸侯の没落に相呼応じて 言わば新領主階層を形成し、諸高等法院を中心とする官僚組織を基盤に、中央集権的封建国家の成立を願う高等法院階層、そして、王権と密接に結びつき、下から広範に生長してくる手工業者初期マニュファクチュア工業者層を国家権力で圧迫し、かれらの特権的利害を守ろうとする特権商人、特権大工業者層を基盤とする王家。これらの勢力のうち、第三の勢力が、地方分権的封建制を激しく破壊する第二の勢力に乗った形で、封建制の最後のそして最高の形態である中央集権的封建国家＝絶対王制を樹立することで、宗教戦争を終結させたのである。つまり、我々が関与する高等法院階層は、封建貴族にとって代わる新興勢力であっても、根源的に反封建的な第二の勢力には対立し、封建制の最後の形態絶対主義の階級的基盤であり、小場瀬氏の考えるように近代

的ブルジョワジーではなかったのだ。

これをイデオロギー的側面から言えば、宗教戦争をナントの勅令 *l'Edit de Nantes* で正式に終結させた *Henri IV* が、カルヴァン主義者のリーダーとなっていたことは、封建制の危機 *la crise du féodalisme* に、地方分権的封建制から中央集権的封建制を打ち建てたため、カルヴァン主義 *calvinisme* の社会的基盤である第二の勢力、そしてカトリック教徒たろうとするが、従来のカトリック *catholicisme* では満足していない第三の勢力のイニシヤティブをとったのだと解したい。だから、ナントの勅令で宗教の自由を条件つきで許し、いったん国家権力を確保すれば、もはや二度とカルヴァン主義を信奉する国王は登場しなかったのである。なぜならカルヴァン主義は、あくまで、根源的に反封建な第二の勢力の思想的表現であった<sup>(29)</sup>。だからこそ、次第に弾圧政策をとり、遂には、ナントの勅令を廃止（1685年）するのである。

次に、ヤンセン主義運動に直接的関係を持つと思われるフロンドの乱 *la Fronde* について、同じく小場瀬氏の見解を批判検討してみよう。

氏は、「古典主義・浪漫主義」の中で、次のように書いている。「……フランスは、戦争のため国庫は窮乏し、税金は加重し、民衆の不満が募った。こうした状勢を利用して、ブルジョアジーの頭部ともいべき高等法院が1648年に反乱を起したが、この上層ブルジョアジー自身が貴族の土地を買って領主になっていたため、農民運動と結びつくことを欲せず、敗北してしまった。そのあとで封建的特権の恢復を夢みる貴族が反乱を起したが、これまたマザランの買収政策で分裂させられ、結局敗北し、一時は王権をくつがえすに見えたこのフロンドの内乱も、1653年には終結した。」<sup>(30)</sup> 旧貴族のフロンド *la Fronde nobiliaire* (1649—53) については異論のない所だが、高等法院のフロンド *la Fronde parlementaire* (1648—49) が、ブルジョワ革命の試みであったとする見解はおかしい。高等法院＝上層ブルジョワジーが領主になっていたからという説明自体二元論で自己矛盾も甚だしいが、この乱以後、氏自身が指摘しているように、王権は「ユルベールのような……第三身分（＝ブルジョワ）出身の大臣を使」い、「

その他の大臣はすべて町民乃至はその上層部である法服貴族の出身であった。」「地方政治の実際は……中央の命によって動く都督 *intendant* の手の中に移」り，「この都督たるや大臣同様第三身分の出身者であった。」のであれば，行政権をブルジョワジーが握ったことになり，「敗北」どころか，ブルジョワ政権の樹立になってしまう。なぜこんな誤りを犯したのかは言うまでもないだろう。高等法院階層をブルジョワジーと単純に規定してしまったからである。だからこそ，氏と同じ見解の *Lucien Goldmann* が，この階層を基盤とするヤンセン主義が，ブルジョワ社会への道を失った，つまり革命の挫折を経験したこの階層の悲劇的世界観だとする考え方に賛同することになるのである。<sup>(31)</sup>

では，高等法院のフロンドの反乱をどう理解すれば正しいのか。つまり，かれらの体制への不満とは何であったのか。

高等法院階層は，先に説明したように，新領階層として *Henri IV* をおして封建制の最後で最高の形態絶対王政を成立させた主体的支柱であった。しかし，この高等法院を中心とする官僚は，その役職が，16世紀の前半から普及した官職販売制度 *vénalité* によって，一つの財産として売り買い出来，従って代々世襲できるものであったから，国家統制には障害となりがちだった。そこで，*Louis XIII* の宰相 *Richelieu* は，より強固な官僚組織の新設を企てる。かれは，高等法院よりも，また高等法院によって（買い）占められている国务会議 *Conseil d'Etat* よりも上位に，枢密院 *Conseil d'en haut* を置き，その直接任命制の下に知事制 *Intendance* を置き，全国に知事 *intendant* を任命派遣して，強力な組織体系を作り上げようとした。この際，かれは高等法院階層をしめ出し，絶対王政の成立以来力を増して来た特権商人・大工業者層（小場瀬，*Goldmann*, *Lefebvre* もこの階層の存在を忘れていたかのようである）を使い，また基盤ともしたのである。これに高等法院が黙っている訳ない。折からの農民一揆に乗って *Richelieu* の企てを止めさせようとしたが，農民の反封建闘争が，かれら自身の地位を危くするのを許す道理がない。こうして高等法院のフロンドはすぐ終わった。この争いは，こうして支配者同志の対立であって，

根源的な対立ではなかったのである。従って、Henri Lefebvre が、かれらの反乱の失敗を「失敗に終わったブルジョワ革命の試み」<sup>(32)</sup> とするのは誤りである。また L. Goldmann がこの階層に属する Antoine Le Maître が、大法官 Chancelier 宛ての書簡で、引退を表明し、最初の Port—Royal の隠士 solitaire になったことを、イデオロギー的性格があるとしたのは正しいが、革命を願うブルジョワ (dans le sens du mot juste) の封建体制への抗議としたのはまちがっている。<sup>(33)</sup> Goldmann は、この誤った把握から高等法院階層、とくにその上層で法服貴族と呼ばれる人々を、革命の不可能性に泣くブルジョワジーの悲劇的英雄 heros tragiques にしたて、ヤンセン主義をその思想的表現と断定してしまった。彼は、ヤンセン主義を次の様に分析する。即ち、ヤンセン主義は三つの要素からなっている。第一は、何も語らぬ隠れた神 le Dieu caché。第二は、墮落にまみれた否定すべき現世 le monde。第三は、この現世を否定し、神と共に生きたいが、神は隠れ、そこに到達することが不可能であるが故に、宙ぶらりんの位置で苦悩する人間 le heros=l'homme。そしてこの悲劇的人間が、ブルジョワ社会という、否定すべき現世=封建社会の彼岸にある価値ある新世界への道を見失った高等法院ブルジョワジーにほかならないというのである。見事な図式 schéma である。しかし、Goldmann の主張は、事実問題としても、方法論的にも疑問である。事実問題としては、すでにおわかりのように、高等法院階層が Richelieu そしてその後継者 Colbert の新官僚組織に不満ではあっても、絶対王政そのものを根源的に否定しているのではないから、かれらを単純に、あるいは機械的に近代的ブルジョワジーとすることはおかしいということ。方法論的には、彼は発生論的構造主義 le structuralisme génétique というマルクス主義<sup>(34)</sup>のもとに、下部構造と上部構造が類比関係にあると考えているようだが、イデオロギーの歴史的役割はしばしば、現実の矛盾をおおうことにある。具体的に言えば、Jansenius は、人間の取り返しのつかぬ墮落を強調しながらも、神と共にありえることを否定していないのである。この点、ヤンセン主義が、中世封建領主のイデオロギーであったトミスム thomisme<sup>(35)</sup>

の伝統を受けついでいることを忘れてはならない。

さて、Goldmannは、実在を類比的に反映しているとするヤンセン主義が、そのままラシーヌ劇にもあるのだとして、Racineの諸作品を分析した。

彼は、その分析を「Andromaque」から始め、（この際、「Andromaque」以前の二作品「La Thébaïde」「Alexandre le Grand」を習作として取り上げなかったことには少々抵抗を感じる。とくにヤンセン主義的発想が濃厚に見られる「La Thébaïde」に触れなかったのはおかしい。<sup>(36)</sup>）

Andromaque と Oreste—Hermione—Pyrrhus を質的に異なると区別した。これは鋭い分析であり、極めて妥当であると思う。Oreste らのグループが、ヤンセン主義でいう、取り返しのつかないほど穢れ、墮落の淵から脱け出ることなく破滅する人間であることは正しい。Andromaque が、墮落を拒絶し、言わゆる聖なる平和 la sainte paix を求めて止まない人間であることも確かである。Goldmann は、これと同じ分析を「Britannicus」においてしている。即ち、Junie と Néron—Agrippine—Britannicus の区別である。これらの登場人物の質的対立を人間と現世（を代表する人間）l'homme et le monde の対立とするのも大いに頷ける<sup>(37)</sup>。しかし、問題はこの対立をイデオロギー的にどう理解するかである。私はこう主張したい。その本性 la nature humaine が取り返しのつかぬ程穢れている人間からなる現実の社会は墮落そのものであるとする考え方は、実は絶対王政を支持するものである。なぜなら、平たく言えば、罪悪ばかり犯し、自らそれを制御できないなら、神の命により絶対王政の権力によって抑制するほかないということになるからだ。これが言わゆる王権神受説につながることはもはや明白である。そして Goldmann の言う「人間」l'homme とは、墮落の奈落にいる民衆どもとは違い、神から選ばれた特別な人間 les élus という訳である。ここがカルヴァン主義との根本的な相違点で、人間は何としてでも救われず、神からの一方的な恩寵によって許されるしかないとするカルヴァン主義に対し、ヤンセン主義は、人間はその本性を傷つけたが、神の姿 l'image de Dieu はまだ残っており、狭き門ではあるが尽力すれば救われ得るとするのである。（従っ

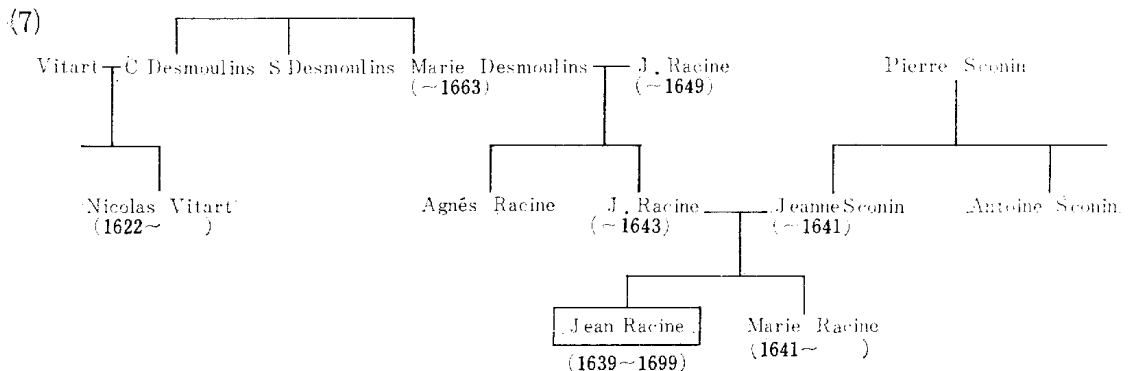
て Goldmann の言う「隠れた神」とは、カルヴァン主義にふさわしいのである。）社会的に見れば、高等法院階層、とくに法服貴族と言われる人人が、そのエリートであると考えたのは当然な話である。（ここで先に残しておいた問題、les Lunies, les Sabléらの封建貴族が、たとえ一時にしろヤンセン主義に傾いたのはなぜかということであるが、かれらは、零落したとはいえ、やはり愚民とは違う貴族 la noblesse であるのだから、共通性を持ちうるということなのだ。これをブルジョワであっても反体制になる人々がいるのだからという類推的こじつけをするのは断じておかしい。）更に、ヤンセン主義でもう一つ見落してならないのは、その道徳的厳格主義 le rigorisme moral である。ヤンセン主義は、人間の行為 l'action humaine の動機を真二つに区別する。一つは、神—創造主への愛 l'amour du Dieu créateur=la délectation céleste, 他方は、創造物への愛=自己愛 l'amour de la Créature=l'amour—propre である。その中間という妥協的考えは存在しない。神への愛を動機としない全ての行為は、厳しく断罪される。具体的には、一般に「三つの欲望—la triple libido」と呼ばれ、肉の欲望 libido sentiendi=concupiscence de la chair, 知の欲望 libido sciendi=concupiscence de l'intelligence, 野心の欲望 libido dominandi=concupiscence de l'ambition（これは、権勢欲と解してもいい）、結局は人間の現世的欲び la délectation terrestre を全て罪悪視している誤で（例えば、「Les imaginaires」論争で、芸術家すら断罪したり、いかなる結婚も罪をまぬがれないとする）、このような厳格主義は、有識有閑階層にしかできぬことである。日本でいえば、禅宗が武家階級に広く浸透し、「南無阿弥陀仏」とか「南無妙法蓮華経」とか言えば、極楽往生できる浄土宗、日蓮宗が農民、町人に受け入れられたことに当たるであろう。この厳格主義は、Racine の作品の容易に看取れる。「La Thébaïde」における Oedipe 家の破滅、「Andromaque」における「あまりの貞節は罪になりましょう。」<sup>(39)</sup> と妥協をすすめられながら窮地に立っても、あくまで守る通す Andromaque の厳しさ、「Britannicus」における、地上的権力を一手に握ったとたん、発狂状態におち

いる Néron。いくつもの例が挙げられよう。

さて、今一度小場瀬氏の見解に戻るが、氏がその著「フランス・レアリスム研究序説」<sup>(38)</sup>の中で、「ラシーヌは町民的立場からこれを描いたのである。」と主張しているが、以上述べてきたことから、単純にブルジョワ作家=Racine とすることはできないことは確かなようである。小場瀬氏は、私のような説を立てると、氏の言う町民文学の進歩性が理解できないと懸念されるが、決してそうでない。Racine について言えば、彼は、旧来の封建制を解体し、絶対王政という統一国を打ち建てた階層の人間として、まさしく氏の言われる着実に合理的な精神の持主であったのである。

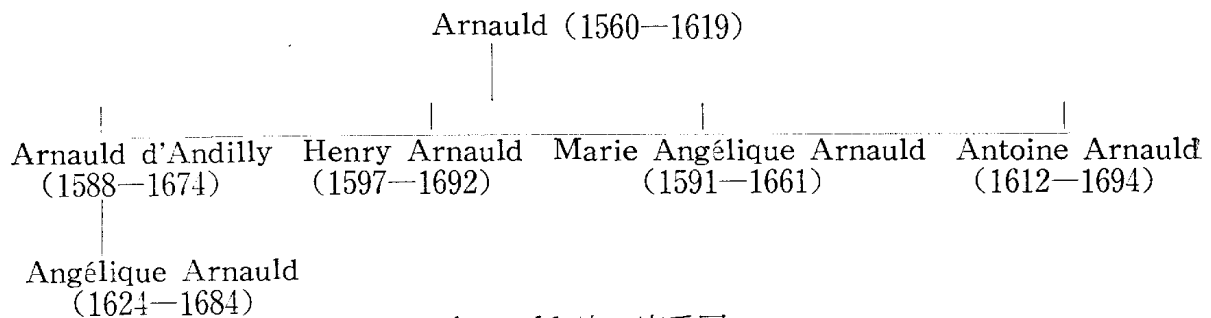
注

- (1) 「Augustinus」は略称で、正式の著書名は「Cornelii Jansenii episcopi Iprensis Augustinus seu doctrina sancti Augustini de humanae naturae…」という長いものだが、簡単に言えば、Augustinusの人間本性 la nature humaine についての神学論文である。なおこの論文は南山大学に所蔵されている。
- (2) Saint-Cyran は、ヤンセン主義運動の実践者として活躍しているが、彼の再生論 renouveau を中心とする厳格主義 rigorisme は、ヤンセン主義形成に大きな力があった。
- (3) Arnauld(1612-1694)は、ヤンセン主義者としてよく知られる人物であるが、イエズス会の良心問題決疑論 casuistique などに見られる放緩主義 laxisme を鋭く批判した「La Fréquente Communion」(1643年)ばかりでなく、「ヤンセン弁護論—Apologie pour Jansenius」(1644年)なども残している。
- (4) 彼によって編集された Racine の全集 (Oeuvres, Les grands écrivains de la France, Hachette を参照されたし。
- (5) 彼の著書「La carrière de Jean Racine」(Gallimard) を参照されたし。
- (6) 間接税の徴収を請負うため、住民から実際以上の税を集め、大金持になる者が多かった。



—— Racine 家の家系図 ——

- (8) 「Port—Royal」, 8 vol., Hachette, 1840—42.
- (9) 「Histoire générale du mouvement janséniste」, Librairie de la Société de l' Histoire de France et de la Société des Anciens Textes Français, 2 vol., 1924.
- (10) 「Les Origines du jansénisme」, Paris, Vrin, 1947.
- (11) Les Grands Ecrivains de la France の Racine 全集 Oeuvres に収められているほか, 単行本としても幾つかある。
- (12) Pierre de Bérulle (1575—1629), フランスの枢機卿 cardinal で, オラトリオ修道会 congrégation de l'Oratoire の創立者。F. Borkenau によれば, 彼も法服貴族の出身であるらしい。
- (13) Franz Borkenau 著「封建的世界像から市民的世界像へ」水田洋他訳, みすず書房, p. 323. なお原著「Der Übergang vom feudalem zum bürgerlichen Weltbild」(Librairie Felix Alcan, Paris, 1934) は, 日本でも数少なく, 入手困難であるが, 新村猛, 水田洋両学者が所有されていることがわかっているだけである。
- (14) 同著 p. 220 参照。
- (15) Richelieu はあまり豊かでない地方貴族の出身で, 母方から言えばパリの弁護士の子孫である。
- (16) Arnauld d'Andilly (1588—1674), ヤンセン主義運動の指導者の一人 Le Grand Arnauld の兄で, Saint—Cyran とは親しい間柄であった。
- (17) 下記の家系図を参照されたい。



- (18) Lucien Goldmann 「Le dieu caché」 (Gallimard 1959), p. 126.
- (19) 「Port—Royal」 Hachette, 1842. 第2巻 p. 232 .

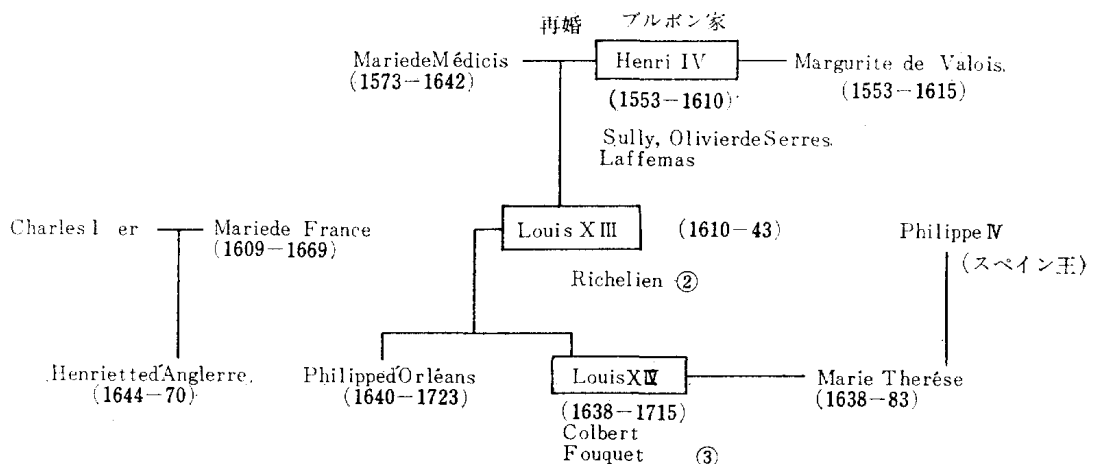
Le vrai fond solide, le support quotidien, nous le touchons ici: les Arnauld comme noyau et comme souche, les Bignon comme alliance et embranchement dans le monde, et au dedans encore, à l'entour, par acquisition étroite et successive, les Briquet, les Saint Marthe, les le Nair, les Thomas Du Fossé, les Pascal.

Un mot littéral exprime ce fait du tiers—état supérieur\*, comme je l'ai appelé, qui compose le fonds de Port—Royal.



\* ここでいう「tiers—état」とは、第三身分の人々の意で、僧侶階層 (= 第一身分) 貴族階層 (= 第二身分) に属さない人々、即ち、農民・手工業者・初期マニファクチュア工業者、高等法院を中心とする官僚、その上層の法服貴族、特権貿易商人、特権大工業者全てを含んでいる。そして Sainte—Beuve が「tiers—état supérieur」と言うとき高等法院階層を指している。

- (20) 羽仁五郎は戦前、三木清、林達夫たちと共同研究の形で「社会史的思想史」(1933年)を出版したが、戦後昭和24年に岩波から再版された。問題の「近世」は、羽仁と清水幾太郎、興水實との共同執筆である。
- (21) エンゲルス「家族・私有財産・国家の起源」
- (22) 小場瀬氏は、「モリエール—時代と思想」の70頁71頁で次の様に書いている。  
この絶対身分王政は、「商工業を庇護し、植民政策を行い、手工業制度を發展させるけれども、決して純粹にブルジョア的政権ではない。」  
「何となれば国王自身最大の領主であり、封建的特権者だったから。」  
つまり絶対王政は、半ブルジョア的半封建的二元的国家権力であるというのである。
- (23) この紙面で、それを立証する訳にはいかないが、中木康夫氏の実証的論文「絶対王制の構造」(未来社1963年)、堀江英一氏の「絶対主義論の悲劇—均衡理論の批判」(経済論叢、昭和26年)などを参照されたい。
- (24) 中木康夫「絶対王制の構造」p. 30.
- (25) 小場瀬氏は、この用語をたびたび使用しているが、「ブルジョアジー」と同じ意味であることを直接聞いて確めてある。
- (26) Henri IV (1553—1610)、在位(1589—1610)、彼は、ナントの勅令 l'Edit de Nantes (1598)によって宗教戦争を正式に終結させた。



①, ②, ③は宰相、大臣の名である。

- (27) (22参照)
- (28) 文学関係では、M. de Montaigneが、カトリックとしてとどまったことは周知の通りである。

- (29) カルヴァン主義については、Jean Calvin の「Institution de la religion chrétienne」をまだ読んでいなくて、暴論かも知れないが、色々な研究書を読んで推論を書いたのだと考えてほしい。しかし、いずれヤンセン主義との関連において取り組まねばならない問題である。
- (30) 同著16頁より引用。
- (31) 「古典主義・浪漫主義」pp. 35~36.  
……ジャンセニスムは、フロンドの乱の敗北によって打ちのめされた法服貴族の心理と思想とをイデオロギー化したもの……
- (32) Henri Lefebvre 「Pascal」邦訳「パスカル」(新評論社、川保兒自訳) p. 23.
- (33) L. Goldmann 「Le dieu caché」(Gallimard 1959), p. 126.
- (34) Goldmann は、自ら「独立派マルクス主義者—marxiste indépendant」と言っている。
- (35) Saint Thomas d'Aquin (1225—1274) の「神学大全」Somme théologiqueを基礎とするカトリック教の理論。
- (36) 「Andromaque」は、1667年に発表され、「La Thébaine」「Alexandre le Grand」は、各々、1664年、1665年に発表された。なお「Britannicus」は、1669年発表である。
- (37) 詳しくは、「Le dieu caché」の第1部 La vision tragique 及び、第4部の Racine を参照されたし。手短かなものとして、同じく Goldmann の著書で「Jean Racine—dramaturgie—」(L'Arche, 1956) がある。
- (38) 「フランス・レアリスム研究序説」(世界評論社、昭和25年) p. 123.
- (39) 「Andromaque」Acte II scène VIII.  
Trop de vertu pourrait vous rendre criminelle.

### 主要参考文献

- Jean Racine : Oeuvres, Les grands écrivains de la France, éditées par P. Mesnard, Hachette, 1885.
- Jean Racine : Oeuvres complètes, du Seuil, 1964.
- Lucien Goldmann : Le dieu cache; étude sur la vision tragique dans les Pensées de Pascal et dans le théâtre de Racine, Gallimard, 1955.
- Lucien Goldmann : Jean Racine, dramaturgie, L'Arche, 1956.
- Raymond Picard : La carrière de Jean Racine, Gallimard, 1956.
- Cornelius Jansenius : AVGVSTINVS, Minerva G. b. H., Frankfurt/Main Unveränderter Nachdruck, 1964.
- Louis Gognet : Le jansénisme, P. U. F., 1961.
- Augustin Gazier : Histoire générale du mouvement janséniste, Librairie

- de la Société de l'Histoire de France et de la Société  
des Anciens Textes Français, vol., 1924.
- Sainte—Beuve : Port—Royal, 8vol., Hachette, 1840—42.
- Henri—Lefebvre : Pascal, Les Editions Nagel, 2vol., 1949.
- Dictionnaire de Theologie Catholique, Librairie Letouzey Et Ane, 30vol.,  
1930—50.
- カール・カウツキー著  
堀江英一・山口和男訳 : フランス革命時代における階級対立, 岩波書店, 1969.
- 中 木 康 夫 著 : フランス絶対王制の構造, 未来社, 1963.
- 大 谷 瑞 郎 著 : ブルジョア革命, 御茶の水書房, 1966.
- 河 野 健 二 著 : フランス革命と明治維新, NHK出版局, 1969.
- 中 村 雄 二 郎 著 : パスカールとその時代, 東大出版会, 1965.
- マックス・ウェーバー著  
梶山力・大塚久雄訳 : フロテスタンティズムの倫理と  
資本主義の精神（上・下） 岩波書店, 1962.
- Franz Borkenau : Der Uergang vom feudalem zum bürgerlichen  
Weltbild, Librairie Felix Alcan, Paris, 1934.  
水田洋他訳「封建的世界像から市民的世界像へ」  
みすず書房, 1969.
- 小 場 瀬 卓 三 著 : 古典主義・浪漫主義, 三一書房, 1957年.  
: 近代精神, 世界評論社, 1949年.  
: モリエール—時代と思想—, 日本評論社, 1948年.  
: フランス・レアリスム序説, 世界評論社, 昭和25年.